墓 活

墓地と聞いてどんなことを想像するだろう？
怖い、気味が悪い、だろうか？
よく晴れた日、そこはまるで静かで気持ちのよい大きな公園だった。
長い時間経過の中で現代の墓問題を緩和しながら、都市の余白となるような地域農園としての墓の風景を提案する。

1 現代の霊園墓地の特徴

まず、霊園における問題として次のことがあげられる。
・後継者がいないことによる維持の難しさ
・多くの親族の居住は遠隔地、地縁の消失
・高齢化に伴い高まる墓需要
→管理・運営能力の低下
・もともと都市の中の公園としての機能も期待され、公園墓地として生まれた霊園。土や緑のある都市空間の中の余白として貴重な空間である。誰でも立ち入れる空間のはずが、墓参り以外で使われることはほとんどない。

2 敷地「北山霊園」

仙台市が運営する北山霊園を敷地とする。
周りを住宅地に囲まれ、高齢者や家族も多く住む。

3 コンセプト

墓 × 都市農園

4 提案

system

維持できずに返還された墓の区画

区画を畑として貸し出し

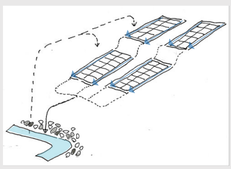
新しい霊園の風景

community

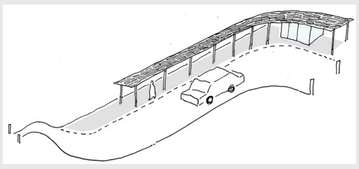
Phase0. 現在
郊外にある北山霊園を訪れる墓参者の多くが週末墓参者であり、普段の霊園には人通りが少なく、落ち葉でいっぱいになった排水溝など整備が行き届いていない。また、北山霊園も近年の墓地問題の例外ではなく、手つかずの墓が多数見受けられる。
Phase1. コミュニティの芽生え
継承者のいない空きの区画を畑に転用し、住民に貸し出す。そこで栽培されるのは草花が主流となる。畑で農作業する人は、収穫物を隣接する墓地の週末墓参者たちに供花としてお裾分けするやりとりから、墓所有者と農作業者のコミュニティが芽生え始める。また、農作業者が頻繁に霊園に出入りすることで人通りが増え、追いついていなかった霊園の美化が進む。
Phase2. コミュニティの確立
霊園内の墓地は新陳代謝を繰り返す。継承者のいなかった墓に新しい所有者が決まれば、一度更地に戻され、農園墓地に代わるまでの間は全面を畑として利用する。農園墓地が増えるたびにこの霊園に関わる人が増え、従来あった墓地への畏怖心、近寄りがたさは和らぎ、栽培物も「草花」から「食物」へと移行し、売買を見込んだコミュニティが確立する。
Phase3. コミュニティの拡張
霊園にはお盆・お彼岸の時期に多くの人が集まる。この時期に合わせ、新築した屋根部分に収穫した食物を売る屋台を設ける。仮設的祝祭的システムで周辺住民だけでなく、さらなる外部の人までコミュニティを拡大し、霊園における循環システムが成立し、持続可能な墓地経営へとつながる。

contents

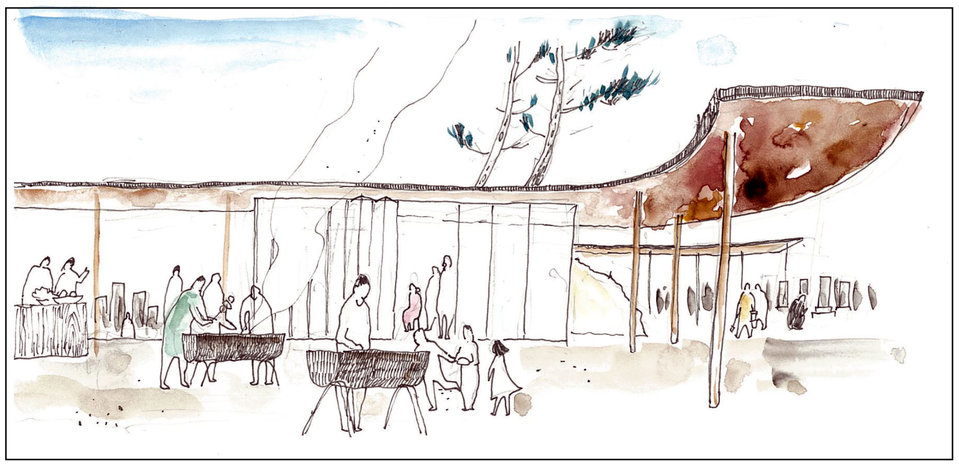
農園の作業に必要な道具を収める。ガラスのボックスは直方体の墓が並ぶ風景にとけ込む。夜間は電球に光がともる。



既存の墓の排水溝を農園においても活用する。また、棚田状の地形を利用して流れる水は一番低い池にためられ、浄化される。雨水、排水は再び利用され、敷地内で水の循環が生まれる。



現在混在している歩行者を車道を分けるため、長い屋根を掛ける。お盆、お彼岸にはそこに屋台が出たり、バーベキューをしたり出来る。

5 Plan

scale = 1:500